

## 博士論文全文に代わる論文内容の要約について

立命館大学大学院社会学研究科  
応用社会学専攻博士課程後期課程

ヒライシ タカシ

平石 貴士

### 1. 題名

「ブルデューの<界>の方法論と対応分析：  
現代日本のポピュラー音楽の構造分析を事例にして」

### 2. 全体要旨

本論文はフランスの社会学者ピエール・ブルデューの<界> (champ) の理論を主題とする。特に彼が重用したものの、これまでの研究では明らかにされてこなかった、(多重)対応分析という統計技術を使用した<界>のデータ分析の方法を中心に検討する。第一部は、彼の主要な理論概念と対応分析を使用した彼のデータ分析の方法を検討し、実際にデータ分析を行うために必要な方法論と課題を検討する。第二部は、実際のデータ分析の事例として、日本のポピュラー音楽の<界>を、邦楽アーティストたちの属性分布の空間として、多重対応分析を使って研究する。第一部と第二部を通して、対応分析と<界>理論の関係、対応分析のためのデータの収集・分析をめぐる理論的課題を明らかにするとともに、ブルデュー理論が社会学理論や文化研究に対して与える貢献と射程を明らかにする。

ブルデューは<界>の概念を、元々は文化や宗教を生産する者たちを研究するための概念として、1960年代に発案し、その後の研究生生活を通して彼の主要概念として発展させ続けた。彼の研究生生活を通じて、<界>は、官僚の<界>、文学の<界>、政治の<界>、ジャーナリストの<界>など、様々な社会領域を研究するための概念へと拡張されていった。彼にとって、近現代社会は様々な機能分化し、相対的に自律した経済、政治、宗教、文化といった様々な<界>同士の関係性の構造によって構築されているものであった。ブルデューは、それぞれに異なっている様々な<界>を調査するための共通の方法、および<界>の一般理論が確立可能であり、そのための著作も準備していると生前述べていた。その計画は彼が亡くなったことで実現されなかったが、本論文は<界>を研究するための共通の方法論を探求している。

本論文は<界>理論を現代社会学理論における重要な理論概念として評価する。なぜなら、文化をめぐる問題では重要となってくる多文化間での視点の違い、あるいはある文化内での様々な視点の差異、社会的立ち位置の違いによる視点の違いといった、多視点性ないし間主観性に関わる課題を引き受けながら、それらの課題と、帰納的に厳密性を持たせようと試みるデータ分析とを<界>理論は結合させようとしているからである。それぞれの<界>の内

部は様々な立ち位置を持った行為者同士の関係性によって構成されるとブルデューは考えていた。そこで<界>の構造をデータ分析によって捉える際に統計技術として用いられたのが対応分析であった。このデータ分析によって、ブルデューの考える構造とは、抽象的な実体の構造ではなく、はっきりとデータによって把握可能な、各個人間の関係性からなる構造として把握されることになる。

<界>を分析するために、ブルデューは対応分析という統計技術を 1976 年にはじめて用い、その後も晩年に至るまで対応分析はブルデューの統計的分析の主要な技術であり続けた。したがって彼の理論を検討するには対応分析の使用は主要論点のひとつになるはずであるが、これまでの研究(大前 1995, 鈴木 1996, 磯 2008a, 2008b)では彼の理論概念の検討が中心であったため、彼の経験的方法論のこの側面はほとんど検討されてこなかった。

この統計技術は 1960 年代にフランスの統計学者ベンゼクリによって開発された。ベンゼクリの弟子たちであるフランスのデータ分析学派は、ブルデューの統計分析に惜しみなく協力し、ブルデュー学派と協力関係を持っていた(近年この学派は「幾何学的データ分析」(Analyse Géométrique des Données)と名乗っている)。ブルデューは、彼らと共に、回帰分析などの量的統計分析において当時すでに支配的になりつつあったアメリカの標準的多変量解析に挑戦し、オルタナティブな社会統計思想を確立しようとしていた。これは社会学史においても重要な事件をなしていると思われるが、これまでほとんど言及も分析もされてこなかった。ブルデューのアメリカ社会学に対する統計分野でのこの挑戦は理論的に検討する意義があると本論文は考える。そのために重要であるのは、彼の理論とデータ分析がどのようにして結びついているかを検討することである。

このような理論的な意義は、第二部においてポピュラー音楽研究の分野なかでも検討される。この分野で支配的な枠組みであるカルチュラル・スタディーズないし文化研究の流れを組んだ議論のなかでも、ブルデューの議論は一定受容されてきた。社会と音楽作品を関係づける理論枠組みにおいて、それまで主流であったマルクス主義の議論に代わって、階級論を引き継ぎつつも、文化と象徴体系の自律性を主張するブルデューの議論は、「文化論的展開」や「言語論的展開」あるいは構築主義的な流れを持ちながら、包括的に社会全体を捉える意図を持った文化社会学の理論として、一定の受容の広がりを持ってきた。

しかしながら、音楽社会学の分野でのブルデュー受容は『ディスタンクシオン』モデル、つまり音楽趣味の階層研究(片岡 1998)にのみ強く惹きつけられてきた。本論文は、それらの社会階層モデルの文化研究が象徴体系の研究というブルデュー理論の側面を見逃してきたと考える。文化生産の<界>は、象徴生産の<界>でもあるのだ。この観点に立つと、消費者たちのこれこれの文化趣味を経済資本や学歴資本などに結びつけることだけが問題なのではなく、文化生産者たち(ポピュラー音楽のアーティストたち)のパフォーマンスが私達

の社会生活のなかでどのような象徴として機能しているか（象徴体系がいかに私達のコミュニケーションの様態を構造として規定しているか）が問題となる。というのも、象徴体系の研究は、階層研究が変数間の関係しか扱えないのとは異なって、人々の感情的作用の側面にアプローチできる利点がある。そして対応分析によるデータ分析は、他の多変量解析よりも、アーティストたちが象徴として機能している様態を、アーティストたち個人の位置関係の分析によって析出しやすいという利点を持っている。なぜなら、神話における神々の位置関係構造の分析と同じように、アーティスト個人間の位置関係構造の分析を行えるからだ。

ブルデュー理論のある部分、つまり社会階層研究における<ハビトゥス>や<文化資本>といった概念の受容だけでなく、文化研究における<界>理論の受容について見てみると、文化研究において<界>理論が切り開いた射程と意義は、ある文化に対する諸視点をそれぞれの立ち位置間の関係構造として対象化することにあった。多文化主義、文化相対主義的態度は現代の常識にもなっているが、しかしながら各人にとっては対象は相対的なものとして現れてくるわけではなく、直観に訴えかけてある像として直接に現れてくるという事実が、文化研究の相対主義的記述においては急所になっていた。そこで<界>理論は、それぞれの人にとって現れてくるものを、互いの立ち位置として捉え、その立ち位置の関係構造を探求するという方向性を取った。

ポピュラー音楽研究の分野においてブルデューを受容し、明確にこの方向性の可能性を汲んでいたのは南田(2001)だった。南田はロック・ミュージックというひとつのジャンル内部の立ち位置の違いを明らかにした。しかしながら、対応分析を使用していない南田のアプローチは、それぞれの立ち位置の描写が具体的にどのアーティストを指しているのかを示さずに分析の結果を示すという記述になっていた。つまり、<界>の全体構造と具体的な生産者個人との関係性についての分析は暗黙のプロセスとなっていた。

したがって、これまでの<界>理論を受容した文化研究ないし文化社会学的研究は、<界>の構造を分析する際に<ハビトゥス><文化資本><界>という概念を使用するが、その分析が文化生産者個々人のデータ分析とは明確に結び付いて示されていないという結果を持っていた。ここで<界>の研究に対応分析を導入することは、これまでのアプローチとは異なって、<界>を構成する諸個人のデータを網羅的に収集することを要求し、それらの諸個人のデータと<界>の構造との結びつきを明確化するという利点がある。対応分析という分析方法は、構造という概念を、個々人から離れた抽象的なものではなく、まさに具体的な個人間の関係として捉える概念へと変えて行けるという利点を持つ。文化生産の<界>を構造化しているのは、「土台」などといった抽象的な規則や概念でもなく、具体的な生産者個人間の関係性であるのだから、だからこそこの分析は個々人の主体性を社会学的分析のなかに取り戻すことができるのである。

### 3. 目的と章構成

本論文は、社会学の対象を文化の領域にまで広げ、多視点性の問題にまで量的分析の範囲を広げた理論家としてブルデューを評価している。特に彼のデータ分析の側面に着目することは、これまで精神科学(文化科学、人文科学)／自然科学あるいは理解／説明などと区分されてきた伝統的な科学的哲学的区分を乗り越えて、文化の科学にまで厳密なデータ分析を広げようと構想していたブルデューの意図に再び焦点を当てることである。このブルデューの方法論に接近するという目的のためには、彼の主要な理論概念を再検討し、それが彼の経験的調査とどのように結びついてきたかを明らかにする必要がある。なぜなら、本論文が明らかにするように、彼の調査設計は、<ハビトゥス>、<資本>、<界>といった概念の相互連関のシステムに依存しているからである。理論概念を確認した後は、それらの概念がどういった調査設計に結実しているかを彼の実際の調査研究から検討する必要がある。そしてこれらの理論概念がデータ分析において具現化するためには、ブルデューにとって対応分析という統計技術が重要な役割を果たした。そのため対応分析を中心に<界>のデータ分析についての彼の方法を詳しく検討する必要がある。これらの一連の検討によって明らかになるのは、多視点性をデータ分析するという領域に踏み込むということは、調査設計者自身への自己分析を要求するということである。なぜならば、研究者自身の視点だけでなく、他者の視点もまた、<界>を構造化しているものとして、データに結びつけるような知性の働きが必要となってくるからである。

第二部のポピュラー音楽の<界>の分析編は、これらの検討課題に取り組みながら、南田(2001)の研究では実現されなかったアーティスト個人に紐付けられたデータ分析を行うことを目的とする。このことによって、構造を構成する個人を明確に捉えることができるようになり、データから構造を明確に帰納することができるようになるだろう。これは個人から遊離した構造という問題含みの社会実体論を斥けることにつながるだろう。

本論文の全体の章構成を大まかに述べておこう。序章では本論文全体の目的、課題、先行研究が提示される。第一部の理論編ではまず第一章では、ブルデューの主要な理論概念が検討される。第二章では、対応分析の概観とともに、ブルデューが対応分析を使用した<界>研究の事例が検討される。第三章では、データ分析が多視点性を扱う際に不可欠な自己分析という問題を検討する。第二部の分析編ではまず第四章では、ポピュラー音楽の<界>を扱うための自己分析、つまりポピュラー音楽を研究対象として眺めるアカデミシャンたちの視点が分析される。第五章では、日本のポピュラー音楽アーティストたちの位置関係を、多重対応分析を用いて、分析する。終章では、各章での議論をまとめ、<界>およびポピュラー

音楽の研究をさらに進めるための課題について述べる。

## 章構成

章構成は以下のようになっている。

序章.....	1
0.1 本研究の背景と目的.....	1
0.2 本研究の対象と方法.....	8
0.3 本論文の構成.....	11
第一部 理論編：〈界〉の方法論と対応分析.....	15
第1章 〈界〉概念の定義：〈ハビトゥス〉〈資本〉との相互関係.....	17
1.1 内在化された〈図式〉と〈ハビトゥス〉.....	21
1.2 分類と象徴：構造化していく力としての〈ハビトゥス〉.....	36
1.3 様々な〈資本〉の形態.....	45
1.4 〈ハビトゥス〉と〈資本〉による〈空間〉の構成.....	58
1.5 構成された〈空間〉としての〈界〉.....	64
第2章 対応分析と〈界〉の調査方法.....	73
2.1 フランスの統計学者たちによる対応分析の開発と展開.....	75
2.2 (多重)対応分析の基本的な性質.....	80
2.3 〈界〉理論の社会思想と対応分析の統計思想との関係性.....	87
2.4 対応分析を使用した〈界〉の構造分析.....	99
2.5 〈界〉の標本集団の作成方法.....	105
第3章 自己分析の道具としての〈界〉理論.....	117
3.1 認識論としての〈界〉.....	119
3.2 視点の歴史性と〈界〉の歴史研究：構造の生成史、構造史、不変の構造.....	125
3.3 相互行為論の視点と〈界〉理論の視点.....	132
小括：〈界〉の一般理論に向けて.....	139
第二部 分析編：現代日本ポピュラー音楽の〈界〉の研究.....	142
第4章 「ポピュラー音楽」概念の構築をめぐる.....	144
4.1 「ポピュラー音楽」に対する諸視点の〈空間〉の構築.....	148
4.2 音楽学の形式美学の視点と社会学の視点.....	172
4.3 ポピュラー音楽資本.....	181
4.4 音楽資本と階級.....	191
第5章 アーティスト空間の構造分析.....	200
5.1 ポピュラー音楽アーティストの標本集団の作成.....	202
5.2 アーティスト集団の記述統計と分析に投入された属性.....	208
5.3 多重対応分析の結果の解釈.....	216
5.4 音楽ジャンルと性.....	229
小括：さらなるポピュラー音楽の〈界〉の研究に向けて.....	236
結論.....	242
参考文献.....	259

## 4. 各章要約

### 第一章

第一章では、<界>概念を明らかにすることを目指した。ブルデュー自身が述べるように、彼の3つの主要概念、<ハビトゥス>、<資本>、<界>は相互に関連して定義されている。またこれらの3つの主要概念を扱うためには、ディスポジション(性向)、シエム(図式)、シェーマ、象徴体系、実践といった彼の多用した概念まで検討する必要があった。ブルデューにとって、<ハビトゥス>はディスポジションとシエムによって定義される。まずどちらの概念も、過去の経験が蓄積されたものと定義される。次にディスポジションは未来に向けて準備された配置や態勢、素質を意味し、シエム(図式)はピアジェの心理学に由来する用語で状況が異なっても同一の行為を生起させるように獲得された構造を意味する。

<ハビトゥス>のこの議論は実践(プラティーク)や象徴の概念に接続されている。まず実践状態においては人は完全に意識的な行為を行う時間的余裕を持たないので、獲得された図式によって行為を生み出さざるをえず、社会分析ではこの時間レベルでの分析が重要となる。これは身体性や無意識の議論にもつながる。ブルデューの象徴概念は、カッシーラーの議論に由来する。象徴を通じて、人間は世界を形として捉えることができるという点、また象徴は社会的約束事であり、ソシユールのラングのような社会的約束事性を持つという点から、象徴体系や象徴構造とも呼ばれる。<ハビトゥス>は、象徴体系の操作を獲得し、世界を形だつて認識したり、それを物質的な表現として具現化したりすることを可能にする能力である。

<ハビトゥス>の能力は、<界>において行為を可能にするという点において「身体化された<資本>」としても機能する。芸術の<界>では、芸術という象徴を読み解き、またそれを物質的に生産するという能力が要求され、この能力は<資本>として通用する。また<資本>は、マルクスが身体的な資本を可変資本、物的な資本を不変資本と見ていたように、物体化された形態で存在する。物体化した<資本>もまた、ブルデューにおいては、<界>との関係において定義されるものとされる。芸術の<界>では、芸術作品や作品生産に必要な道具などが物体化した<資本>である。また3つ目の<資本>の形態として、学歴や資格などの制度化された<資本>がある。様々な<形態>の資本は、相互に転換する関係にある。例えば、貨幣という経済的資本は、文化資本を身体化するための設備や時間的余裕を与える。

様々な<界>は通用する<資本>の種類が異なるということによって定義されると同時に、今度はそれぞれの<界>の内部が、<界>の構成員たちの<ハビトゥス>や<資本>の種類がさらに細かく異なるということによって定義されてくる。芸術ハビトゥスや芸術資本は、政治の<界>とは異なって芸術の<界>を定義するだけでなく、今度は芸術の<界>のなかで、様々な異な

った芸術スタイルを生み出す芸術資本として細分化した形態を持つ。その<界>のなかで違った<ハビトゥス>や<資本>が混在して存在しているということから、それらの特性によって<界>における諸個人の立ち位置の違いが出てくる。したがって、まずある<界>は他の<界>と有効な<資本>が違うということで区別される。次にそれぞれの<界>内部で、異なった種類の<ハビトゥス>や<資本>を持った諸個人が異なった立ち位置を持って相対していることが捉えられる。したがって<界>を研究することは、その<界>に現れる諸個人の<ハビトゥス>と<資本>の差異を調査するということに帰着する。

## 第二章

第二章では、ブルデュー理論と対応分析とのあいだにある親和性の理由およびブルデューの<界>のデータ分析における実際的な調査設計の枠組みについて検討した。まず Lebaron et Le Roux(2015)の研究に基づいて、対応分析などを開発したベンゼクリおよびフランスデータ分析学派の歴史と対応分析の基本的な性格について述べた。多重対応分析は、カテゴリカル(質的)なデータをその属性の出現確率から数学的に距離測定することで分析していく方法であり、個人×属性変数からなるデータ表に適用される。最終的に最も多くデータの分散を説明する軸から順番に複数の軸が計算され、それぞれの軸における座標ポイントの近接・遠隔の関係からデータ構造の分析を行っていく。要約すれば、近い属性を持った個人同士は近い位置に、遠い属性を持った個人同士は遠くにプロットされる散布図が生成される。

ブルデューがこの方法に親和性を見出した理由は、関係論的思考と構造的因果性に求められる。ブルデューは<界>を位置関係の近さ、遠さの空間として見ていたため、彼にとってこの分析方法は適切であった。また、構造的因果性という彼の社会思想が、彼からすれば線的因果性という思想に囚われている回帰分析を拒否する理由になった。諸個人の属性は、どの個人にとっても均質に作用するのではなく(例えば高学歴→高収入という線的因果性はそれだけで作用するわけではない)、他の属性との関係によって、同じことになるが、それぞれの位置によって異なって作用する。対応分析は、そういった属性間の関係のネットワークを近い集合、遠い集合という図示によって示すことができる。ブルデューにとっては諸個人が作り出す立ち位置の関係構造こそ対象化すべき構造であった。

しかしながら、対応分析を用いれば、彼の目指した社会構造が分析できるというわけではない。対応分析の数理的な構造だけでなく、分析に投入するデータの生成の仕方こそ、問題にしなければならない。そのために次に、ブルデューが<界>の標本を作成する際の方法を検討した。彼がどのように<界>を構成しているだろう人物群を特定し、次にその人物群についてどのような属性変数を調査したか。『ホモ・アカデミクス』や『国家貴族』などの分

析を検討した結果、彼は、<界>のなかで諸個人が保有する<資本>(ないし権力)の保有量の大きさを標本抽出の基準にしていることが明らかになった。また<界>のなかで大きな権力を持つ 100～200 人程度の個人の標本に対して、数十を超える詳細な属性データを収集していくという方針を取っていたことがわかった。

### 第三章

第三章では、<界>理論の自己分析の側面を検討した。文化領域についての調査・分析を行うためには、研究に用いる概念や対象の分類方法といった研究者自身の視点を常に自己反省する必要がある。<界>理論は、研究者自身にも適用されうる。つまり、研究者自身が研究者の<界>のなかにいるということを考えることによって、自己反省の道具としても使用できるという性質を持っている。

研究者は理論空間のなかにおり、自分の理論を持ち、その理論を通して研究対象を知っている。多視点性によって構成された社会の構造へと接近するためには、対抗的な理論が持つ視点をむしろデータ分析のなかに投入することが有効となる。そのためにこそ、この努力は自己分析という意味合いを帯びる。

理論空間のなかでブルデュー理論および<界>理論は、古典的社会学理論家たちの関係空間からも位置づけられるだろうし、質的調査や量的調査の使用の仕方からも位置づけられるだろう。ライール(Lahire 1998, 2012)は、相互行為論や主体の多次元性への参照からブルデュー理論の批判を進めており、その批判からはデータ分析の領域においては観察規模と観察期間の差異という論点を引き出すことができる。ブルデューの<界>研究は、権力を最も多く人物たちの属性を観察するという規模を持つ傾向があり、またある 1 年においてそれらの人物の成した行動を観察するという観察期間を持つ傾向があった。

次にその<界>が生成される最初の時期、つまり構造が生成される時期に対する歴史的観察を重視する傾向があること、また対応分析によってある時期 A とある時期 B との構造の変化を比較する構造史という発想、またそれらの分析に基づいて、ふたつの時期のあいだで、不変の構造が観察されるなどの見解をブルデューが引き出していることが確認された。

### 第四章

第二部の第四章では、ポピュラー音楽の<界>の調査における分析視点を自己分析するために、ポピュラー音楽に対する理論的な視点の空間を検討した。この理論空間には、まず第一に、CS に代表されるように、「人々の抵抗」という表現で表される政治的に理想化されたポピュラー音楽の視点がある。第二に、音楽芸術学のなかで発展した音楽美学の形式主義による定義であり、これはジェンダーや年齢といった、形式主義以前にある「社会的」とも



言いうる要素を分析から除外する傾向がある。このふたつの理想化された観点は学者の<界>におけるアカデミック資本の獲得のための必要な代償として分析される。しかしながら現在の実際のポピュラー音楽の<界>は、メディア文化の進展という歴史が「民謡」などの大衆文化を駆逐するなかで、政治的理想主義とも形式主義とも異なったメディア資本によって構造化されるようになったという性質を持つ。有名であること、多くの人に記憶されることで象徴として具現化することが各アーティストを、多くの社会の成員にとって共通に使用可能な象徴足らしめる。彼ら自身がある象徴であると同時に、象徴としての作品を作り出す作り手でもある。

音楽の形式主義的分析は、19世紀ヨーロッパにおいて音楽学が成立すると同時に、歌曲よりも器楽曲が重視され、音楽の<界>が宗教や文学から自律することで成立していく過程と並行して、成立していく。対照的にポピュラー音楽は歌を中心にして、そして近年のヒップホップに見られるようにますます言語構造を中心にして成立するようになっている。この点ではE.T.ホフマンやシェンカーよりも、ルソーの『言語起源論』で展開された音楽論にポピュラー音楽は近い。マックス・ウェーバーは『音楽社会学』のなかで、音楽と言語の原初的な結びつきという立場に立ちながら、近代の合理化によって、音楽形式が自律していく様を分析している。これらの分析を総合すると、ポピュラー音楽がいかなる象徴を形成しているかを分析するためには、形式主義的分析では不十分であることがわかる。ポピュラー音楽アーティストは、メディアに現れる映像、パフォーマンス、使用する楽器の種類、ジェンダー、世代などが交錯しながら、象徴となることによって、ポピュラー音楽アーティストとなっている。

こういった観点のポピュラー音楽分析においては、象徴化しているアーティスト集団に焦点を合わせることになる。そのため、標本作成の基準に、左翼的であれ右翼的であれ政治的理想主義の基準を用いて、特定のアーティストを除外することはできないし、形式主義による基準を用いることもできない。また象徴化したアーティストとは、特に有名であり、権力を保有した集団である。したがって、ポピュラー音楽という概念が持ちうる、もう一方の側面、すなわち無名性や地方性といった、人々の身近で演奏しているが象徴化はしていないアーティストたちはこの分析の目標から除外されることになる。

この除外は、ポピュラーという概念の外延を考えるためには考慮しておかなければならない。なぜなら、20世紀全体の歴史を考えた時、レコード・プレイヤーなどのメディア機器は登場時にはかなり高価なものであり、実際には多くの「人々」は「ポピュラー音楽」に参画できなかったという歴史があるからだ。そしてこれらの「ポピュラー音楽」が土着の民謡を駆逐していった後の現代においては、「ポピュラー」の概念は何度も反転していることになる。土着のポピュラーからメディア資本のポピュラーへの変化のなかで、第五章のデー

タ分析の視座は形成されていることになる。

## 第五章

第五章では、多重対応分析を用いて、現代日本のポピュラー音楽アーティストの<界>の構造分析を行った。オリコンのデータに基づき、2014年の週50位のアーティスト1,304を標本抽出し、性別、デビュー世代、グループ規模、iTunes Music Storeに登録された音楽ジャンル、売上枚数、音楽テレビ番組『Music Station』出演回数、音楽雑誌『ロッキング・オン・ジャパン』掲載回数といった変数を用いて、多重対応分析を行った。分析の結果、第一軸は性差、第二軸は世代、第三軸は売上枚数という順序でアーティスト間の差異が構造化されていることがわかった。これは音楽ジャンルが性別と世代によって強く規定されていることを示した。男性アーティストたちはヒップホップ、ロックといった第二次大戦後における英米の男性若者下位文化と、女性アーティストたちはJ-Pop、アニメ・ソングといった戦後の日本の若者下位文化と親和性を持っていた。これは性役割分業の一般的な社会・文化構造とも対応している。男性アーティストは楽器の演奏という文化資本へと方向付けられるのに対して、女性アーティストは歌と踊りという文化資本へと方向付けられる。この二元構造は、第二次大戦後の日本がアメリカの経済力・軍事力との関係のなかで取ってきた関係をジェンダー間関係のなかでも象徴化している。一方で、この<界>があまりにも多数のアーティストによって構造化しているということ、つまり「国民的歌手」の不在は、私たちの社会における象徴体系が集合表象としての共通のコミュニケーション・ツールとしてあまり機能していないということの意味する。ポピュラー音楽は今や「個人的な」象徴との傾向を強め、没干渉的な個々人間の関係をもまた象徴していることになる。

これらの研究によって、データ分析は、形式主義の音楽美学では扱うことのできない側面、つまりアーティストたちの象徴化した側面を扱うことができることを示した。これは象徴体系としての分析を通じて、音楽分析と社会分析をつなげる方法である。音楽的世界は確かに、言語、科学、経済関係といった他の象徴とは異なった性質をもつ、音楽的象徴を使った、ひとつの自律的な世界形成の仕方である。現代社会において、音楽的世界そのものは全体社会のなかでひとつの象徴となっている。その象徴を通じた関係によって、音楽的世界は他の社会領域とも繋がっている。そのために、ポピュラー音楽アーティストたちの作品は、音楽的世界という独自の世界を生み出すと同時に、社会の一般的な性役割分業といった、生活において最も近い世界ともつながることができる。

### 5. まとめ (結果・考察)

本論文は、<界>のデータ分析というブルデューの経験的な方法に議論の焦点を合わせた。

その結果、むしろ彼の理論全体における主要テーマを検討することになった。なぜなら、彼のデータ分析には、<ハビトゥス>、<資本>、<界>、実践、科学の対象を構築する際の自己反省と自己分析といった彼の主要テーマのすべてが含まれているからだ。第一部の研究は、彼のデータ分析の方法を明らかにすることで、ブルデューの理論を厳密な経験的調査とを結びつける道筋を示した。

このようにブルデューの量的・経験的調査の方法を明確化し、ひとつの方法論としてまとめ上げることは、様々な<界>の研究にそれぞれの領域を専門にした研究者たちが共通の方法で参加することを可能にすることで、それらの<界>の相互の関係性や、それらの<界>のあいだで交換・転換される<資本>のシステムの解明を進めていくことに貢献できるかもしれない。そのような貢献をすることを本論文は望んでいた。

本論文で発見したことについては、すでに各章のまとめで述べたので、ここでは最後に対応分析を<界>の研究に用いることについての評価を述べておこう。対応分析による<界>の研究は、本論文第二部で行ったように、個々人と立ち位置の関係の分析プロセスを明確化するという利点を持っている。ところが実は、これは必ずしも利点だけではない。本論文は、先行研究として上げていた南田(2001)の分析を、アーティスト個々人と構造分析の結びつきが分析のなかで明確ではないとして批判対象としていた。しかしながら、本研究の結果から再考するに、南田の分析は、その関係性が明示されていないがために、むしろ南田が析出したロック・アーティストの立ち位置が一体どのアーティストに当たるのかを読み手が想像できるという利点を持っている。対応分析は、悟性の要求する厳格な論理的帰結を要求できるものの、文化の分野では想像力の働きは過小評価することはできず、南田の仕事はむしろ想像力に働きかけられるという利点を持っている。というのも、文化という分野において想像力に奉仕しない悟性はむしろ誤る可能性があるからだ（分析のなかでデータ化されていないが、現実のなかでは想像力が働いている部分をデータ分析が切り落としてしまう）。また個人名と紐付けられたデータ分析は個人を明確に表象してしまうという学術的というよりは社会的な危険、つまり個人告発の意図を疑われるという危険もある。しかしながら、文化をめぐる社会科学においてデータから概念を形成する際の帰納の仕方を明確にしようとするために、データ分析という道を通ることも、文化に貢献するまた別の利点があるだろう。それは、もしもこの努力が想像力の発揮する場所をより理論的な場所に移動させることに貢献しうるならば、持ちうるだろう利点である。あるアーティストが象徴として他と異なるのは、一体いかなる属性によってであるのか、ということのデータ上での明示化が迫られるならば、暗黙のうちで働いていたそれらの判断基準を理論化せざるをえなくなるからである。

## 6. 主要な参考文献

- バシュラール, ガストン, 1976, 関根克彦訳『新しい科学的精神』中央公論新社.
- Bloch, Henriette et al.(dir.), 1999, *Grand dictionnaire de la psychologie*, Larousse.
- Bourdieu, Pierre , 1966, « Champ intellectuel et projet créateur, » *Les temps modernes* : 865-906.
- , 1967, « postface » in Panofsky ,Erwin, *Architecture gothique et pensée scolastique*, Minuit.
- , 1971a, « Champ du pouvoir, champ intellectuel et habitus de classe, » *Scolies. Cahiers de recherches de l'École normale supérieure*, 1 : 7-26.
- , 1971b, « Genèse et structure du champ religieux, » *Revue française de sociologie* 12(3) : 295-334.
- , 1971c, « Une interprétation de la théorie de la religion selon Max Weber, » *Archives européennes de sociologie*. XII. n 1. :3-21.
- , 1977, « Sur le pouvoir symbolique, » *Annales. Économies, Sociétés, Civilisations*, 32(3) : 405- 411.
- , 1979a, *La Distinction. critique sociale du jugement*, Minuit. (=1990, 石井洋二郎訳『ディスタクションI・II 社会的判断力批判』藤原書店.)
- , 1979b, « Les trois états du capital culturel », *Actes de la recherche en sciences sociales*. 30:3-6.(=1986, 福井憲彦訳「文化資本の三つの姿」『actes1』日本エディタースクール出版部:18-28.)
- ,1980, *Le Sens Pratique*, Minuit. (=1988, 今村仁司・港道隆訳『実践感覚(1)』みすず書房; 1990, 今村仁司・福井憲彦・塚原史・港道隆訳『実践感覚(2)』みすず書房.)
- ,1981, *Questions de Sociologie*, Minuit.(=1991, 田原音和監訳『社会学の社会学』藤原書店.)
- , 1983=1986. “The Forms of Capital.” in J.G.Richardson(ed.) *Handbook of*

- Theory and Research for the Sociology of Education*, New York: Greenwood Press:241-258.
- , 1984a, *Homo Academicus*, Minuit. (=1997, 石崎晴己訳, 東松秀雄訳『ホモ・アカデミクス』藤原書店)
- , 1984b, « Espace social et genèse des "classes" », *Actes de la recherche en sciences sociales*, 52-53:3-14.
- , 1987, *Choses Dites*, Minuit.(=1988, 石崎晴己訳『構造と実践』新評論.)
- , 1989, *La Noblesse d'État*, Minuit. (=2012, 立花英裕訳『国家貴族 I・II——エリート教育と支配階級の再生産』藤原書店)
- , 1991, « Le champ littéraire, » *Actes de la recherche en sciences sociales*, 89 : 3-46.
- , 1992→1998, *Les Regles de L'art. nouvelle edition revue et corrigée*, Seuil. (=1995, 1996, 石井洋二郎訳『芸術の規則 I・II』藤原書店.)
- , 1994, *Raisons Pratiques Sur La théorie de l'action*, Seuil.(=2007, 加藤晴久、石井洋二郎・三浦信孝・安田尚訳『実践理性』藤原書店.)
- , 1997, *Méditations Pascaliennes*, Seuil. (=2009, 加藤晴久訳『パスカルの省察』藤原書店.)
- , 1999, « Une révolution conservatrice dans l'édition » *Actes de la recherche en sciences sociales* 126-127 : 3-28.
- , 2000, *Les structures sociales de l'economie*, Seuil.(=2006, 山田鋭夫・渡辺純子訳『住宅市場の社会経済学』藤原書店.)
- , 2012, *Sur l'État. Cours au Collège de France 1989-1992*, Raisons d'agir.
- , 2013b, *Manet : révolution symbolique*, Raisons s'agir.
- , 2015, *Sociologie générale. vol.1. Cours au Collège de France 1981-1983*, Raisons s'agir.
- , 2016, *Sociologie générale. vol.2. Cours au collège de France 1983-1986*, Raisons

s'agir.

Bourdieu, Pierre et Darbel, Alain, 1966, « La fin d'un malthusianisme », in DARRAS(dir.), *Le partage des bénéfices*, Minuit.

Bourdieu, Pierre et de Saint Martin, Monique , 1976, « Anatomie du Goût » *Actes de la recherche en sciences sociales* 2(5) : 2-81.

———, 1978, « Le patronat » *Actes de la recherche en sciences sociales*, 20-21 : 3-82.

Bourdieu, P, Chamboredon, J-C. et Passeron, J-C., 1968→2005, *Le Métier de sociologie. 5e édition*, Mouton de Gruyter. (=1994, 田原音和・水島和則訳『社会学者のメチエ』藤原書店.)

Bourdieu, Pierre et Wacquant, Loïc, 1992, *Réponses : Pour une anthropologie réflexive*, Seuil. (=2007, 水島和則訳『リフレクシブ・ソシオロジーへの招待』藤原書店.)

Clarke, John, Hall, Stuart, Jefferson, Tony and Roberts, Brian, 1976 → 2003, “Subcultures, Cultures and Class: A theoretical overview” in Stuart Hall and Tony Jefferson ed., *Resistance Through Rituals. Youth subcultures in post-war Britain*, Routledge.

Clausen, Sten-Erik, 1998, *Applied Correspondence Analysis. An introduction*, Sage.

クロスリー, ニック, 2001=2012, 西原和久・堀田裕子訳『社会的身体—ハビトゥス・アイデンティティ・欲望』新泉社.

David Marx, W. ,2012. “The Jimusho System : Understanding the Production Logic of the Japanese Entertainment Industry” in *Idol and Celebrity in Japanese Culture*, Palgrave Macmillan.

Duval, Julien, 2013, « L'analyse des correspondances et la construction des champs, » *Actes de la recherche en sciences sociales*, 200 : 100-123.

Durkheim, Émile et Mauss, Marcel, 1903, « De quelques formes primitives de classification. Contribution à l'étude des représentations collectives ». *Année sociologique*,6:1-72(=1980, 小関藤一郎訳『未開の分類形態』法政大学出版局)

Fabiani, Jean-Louis, 2016, *Pierre Bourdieu. Un structuralisme héroïque*, Seuil.

- フリス, サイモン, 1983=1991, 細川周平・竹田賢一訳『サウンドの力』晶文社.
- Frith, Simon, 1988, "Industrialisation of Music" in *Music for Pleasure: Essays in the Sociology of Pop*, Routledge.
- Grenfell, Michael et Lebaron, Frédéric (ed.), 2014, *Bourdieu and Data Analysis*, Peter Lang.
- Grignon, Claude et Passeron, Jean-Claude, 1989, *Le savant et le populaire*, Gallimard / Seuil.
- Hennion, Antoine (1983=1990) "The Production of Success. An Antimusicology of the Pop Song", *Popular Music*, 3, :159-193.
- Héran, François, 1987, « La seconde nature de l'habitus: Tradition philosophique et sens commun dans le langage sociologique ». *Revue française de sociologie*, 28(3):385-416.
- 稲垣良典, 1981, 『習慣の哲学』創文社.
- 石村多門, 1999, 「構造的因果性と諸科学」『日本物理學會誌』54(8):636-644.
- 磯直樹, 2008a, 「『再生産』以降のブルデュー —1970年代における3つの基礎概念の形成—」『社会学史研究』30:125-140.
- , 2008b, 「ブルデューにおける界概念 —理論と調査を媒介にして」『ソシオロジ』53(1):37-53.
- 片岡栄美, 1998, 「音楽愛好者の特徴と音楽ジャンルの親近性—音楽の好みと学歴・職業」『関東学院大学人文科学研究所報』22:147-162.
- , 2001, 『現代文化と社会階層』東京都立大学博士論文.
- 北田暁大+解体研編著, 2017, 『社会にとって趣味とは何か —文化社会学の方法規準—』河出書房新社.
- 近藤博之, 2008, 「多重対応分析を用いた社会空間の構築—階層研究の新たな展開を求めて」, 『社会調査における測定と分析をめぐる問題』(2005年SSM調査シリーズ12):161-177.
- , 2011, 「社会空間の構造と相同性仮説:日本のデータによるブルデュー理論の検

- 証』『理論と方法』26(1): 163-186.
- , 2014, 「ハビトゥス概念を用いた因果の探求」『理論と方法』29(1):1-15.
- Lahire, Bernard, 1998, *L'homme pluriel: Les ressorts de l'action*, Paris, Armand Colin / Nathan (=2013, 鈴木智之訳 『複数的人間』法政大学出版.)
- , 1999, « Champ, hors-champ, contrechamp » Lahire, Bernard(dir.) *Le travail sociologique de Pierre Bourdieu. dettes et critiques*, La Découverte : 23-57.
- , 2004, *La Culture des individus. Dissonances culturelles et distinction de soi*, La Découverte.
- , 2012, *Monde pluriel : Penser l'unité des sciences sociales*, Seuil.(=2016, 村井重樹訳『複数的世界 社会諸科学の統一性に関する考察』青弓社.)
- Lebaron, Frédéric, et Brigitte Le Roux(dir.), 2015, *La méthodologie de Pierre Bourdieu en action. Espace culturel, espace social et analyse des données*, Dunod.
- Lenoir Rémi, 2004, « Espace social et classes sociales chez Pierre Bourdieu », *Sociétés et Représentations*, 17:385-396.
- Le Roux, Brigitte, 2014, *Analyse géométrique des données multidimensionnelles*, Dunod.
- Le Roux, Brigitte et Rouanet, Henry , 2010, *Multiple Correspondence Analysis*, Sage.
- 前川真行, 1997, 「過剰決定から構造的因果性へ」『人文學報』80:145-169.
- レヴィ＝ストロース, クロード, 1958=1972, 川田順造ら訳『構造人類学』みすず書房.
- , 1962=1976, 大橋保夫訳『野生の思考』みすず書房.
- Martin, John Levi, 2003, “What Is Field Theory?”, *American Journal of Sociology*, 109(1):1-49.
- マルクス, カール, 1894=1997, 社会科学研究所監修・資本論翻訳委員会訳『資本論』第三卷 a, 新本日本出版.
- , 1859=2001, 宮川彰訳『『経済学批判』への序言・序説』新日本出版.
- 南田勝也, 1999, 「ロック音楽文化の構造分析:ブルデュー〈場〉の理論の応用展開」『社会



- 学評論』49(4) : 568-583.
- , 2001, 『ロックミュージックの社会学』青弓社.
- , 2014, 『オルタナティブロックの社会学』花伝社.
- 宮内勝, 2016, 『音楽の美の戦いと音楽世界』文芸社.
- 『Musicman 2015-2016』エフ・ビー・コミュニケーションズ社発行、2015年7月.
- 大隈昇・ルバル,L・モリノウ,A・ワーウィック,K.M・馬場康雄, 1994, 『記述的多変量解析法』日科技連.
- 小田部胤久, 1995, 『象徴の美学』東京大学出版会.
- 大前敦巳, 1995, 「P.ブルデューにおける『社会空間』と『界』の構築：データ分析を通じた反省的 sociology の可能性」『上越教育大学紀要』 14 : 509-523.
- 『Rockin'on Japan』2014年1月～12月号, ロッキング・オン社発行.
- Saint-Martin, Monique de, 2013, « Les tentatives de construction de l'espace social, d'« Anatomie du goût » à La Distinction. Quelques repères pour l'histoire d'une recherche », in Philippe Coulangeon et Julien Duval(ed.), *Trente ans après La Distinction, de Pierre Bourdieu*, La Découverte.
- Savage, Mike and Goya, Modesto, 2011, "Unravelling the omnivore: A field analysis of contemporary musical taste in the United Kingdom", *Poetics*.39(5):337-357.
- Serre, Delphine, 2012, « Le capital culturel dans tous ses états », *Actes de la recherche en sciences sociales*, 191-192 : 4-13.
- Schephard, John, 1982, "A Theoretical Model for the Sociomusicological Analysis of Popular Musics", *Popular Music*, 2:145-177.
- 鈴木智之, 1996, 「作品の科学はいかにして可能となるか —P.ブルデューにおける『文化的生産の場』の理論をめぐって—」『社会学評論』47(2・17) : 171-185.
- Swartz, David, 1997, *Culture and Power: The Sociology of Pierre Bourdieu*, University of Chicago Press.

Thornton, Sarah , 1996, *Club Cultures. Music, Media and Subcultural Capital*.  
University Press of New England.

ヴィリオン, ドナルド=フィリップ, 1979=2013, 「序章」, エルンスト・カッシーラー著, 神野慧一郎・藺田担・中材敏郎・米沢穂積訳『象徴・神話・文化』ミネルヴァ書房.

ウェーバー, マックス, 1921→1956=1967, 安藤英治・池宮英才・角倉一朗訳, 『音楽社会学』創文社.

山本哲士, 1988, 『超領域の思考へ—現代プラチック論』日本エディタースクール出版部.

———, 1992, 「プラチックとプラクシスの差異—客観化することの客観化: 一つの構造主義批判」山本哲士監修『プラチック理論への招待—暗黙の思考領域をどう捉えるか』三交社.